

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 5月 27日現在

機関番号： 1 0 1 0 1

研究種目： 若手研究（B）

研究期間： 2 0 1 0 ~ 2 0 1 2

課題番号： 2 2 7 6 0 4 9 5

研究課題名（和文）日本製鐵広畑製鐵所の社宅街開発と広畑の都市形成に関する研究

 研究課題名（英文）A historical study for development process of company town of *Nippon Steel Corporation Hirohara works* and city formation for *Hirohata* at *Himeji City*

研究代表者

角 哲 (KAKU Satoru)

北海道大学・大学院工学研究院・助教

研究者番号： 9 0 4 5 5 1 0 5

研究成果の概要（和文）：日本製鐵広畑製鐵所社宅街の敷地選定、開発方針、福利厚生施設の種類の、施設配置の特徴について、開発において主導的な立場にあった進来要『建設ヲ顧ミテ』（1941）をもとに明らかにした。また、進来の在外研修先のひとつであるドイツ・ルール地方の製鐵所社宅街の視察を行ない、共通点と相違点を把握した。さらに、釜石と室蘭の製鐵所との比較、社宅街開発が都市形成に及ぼした影響（新興工業都市計画を含む）の検討を行なった。

研究成果の概要（英文）：This study has two aims. One is grasp development process of company towns of *Nippon Steel Corporation Hirohata Works*, another is city formation of *Hirohata* where locate southern part of *Himeji City*. I took notice for the book "Look back on development"(1941) written by K. SUZUKI who was an important executive of *Nippon Steel*. And I researched about company towns of mining and steel company, *Krupp*, *Tyssen*, *G.H.H.* and so on, at Ruhrgebiet in Germany where *SUZUKI* had visited over there on early 20th century. In this study I cached some informations about idea of development, kind of welfare facilities, site plans of company towns and influences of urban planning by Japanese Government at that time.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野： 工学

科研費の分科・細目： 建築史・意匠

キーワード： 広畑製鐵所・日本製鐵・社宅街・福利厚生施設・進来要・都市形成

## 1. 研究開始当初の背景

近年、企業社宅街に関する事例研究が継続的に発表されているが、業種や論点は住多岐にわたり、比較研究が難しい。こうした中で、申請者は製鉄・製紙の工業系企業を事例に、福利

施設の種類の機能・配置に着目し、企業城下町の空間特性について論じてきた。一方、社宅街を横断的に捉えた研究に『社宅街企業が育んだ住宅地』（2009）があり、申請者も執筆した。同書では社宅街の体系化を試

みているが論点は種々雑多で、焦点を絞った論考の必要性も浮彫りになった。海外ではJ.S.Garner博士が"Model Company Town" (1984) で単一工業都市company town、複数工業都市corporate townなど6つに分類しており我国においても同様の細分化が期待される。このほか、英国のNew LanarkやイタリアのCrespi d'Addaなどがユネスコ世界文化遺産に登録されていること文化庁の近代化遺産総合調査(1990～)や経産省の近代化産業遺産群(2007～)に、社宅街を核とした企業城下町が少なからず取り上げられ、産業遺産としての注目度も高い。当該研究の論点の多様性の背景に社宅街それ自体が都市であることがある。また、多くが地方の社宅街のため、その開発経緯を把握することは、自ずと地方の都市形成の把握を意味する。ただ、社宅街研究の立脚点は「民」に特化しているため、社宅街による「官」の視点を重視していない都市形成の把握には、双方からのアプローチが不可欠である。

## 2. 研究の目的

本研究は、現新日鐵広畑を事例に、従来住宅史や郊外住宅地の切り口で語られてきた企業社宅街について、開発意図と法定都市計画という官・民双方の観点から検討を加え、各々が都市形成に果たした役割と空間特性の把握を目的とする。広畑製鐵所は、軍の要請で昭和14年に稼働した工場で、企業・政府・行政団体・設計組織・建築家などが、住宅から都市に至るまで様々なレベルで関与したため、これまで官・民いずれかの視点に偏っていた社宅街研究の発展を期待できる好例である。本研究の成果は、近代に隆盛をみた鉦工業都市、所謂「企業城下町」が抱える構造的な問題を建築・都市史の分野から解き明かし、今後の都市整備や地域の活性化に少なからず寄与するだろう。また、近代化遺産のストックや評価に一定の指針を提示する役割も期待できる。

## 3. 研究の方法

3年計画で実施し、初年度は広畑製鐵所所蔵資料収集と整理、現況の悉皆調査を実施した。ここから、社宅エリアを特定し、翌年度以降に重点的な調査が必要なエリア、考察の論点となりそうな事象の把握を行なった。また、海外の鉄鋼業社宅街についても理解を深め、相違点を探るため、ドイツ・ルール地方のクルップ、ティッセン、G.H.Hの社宅街の現況調査と資料収集を置と新興工業都市計画の内容の具体的な把握を行なった。前者は国土地理院の航空写真、後者は国立公文書館の『公文雑纂』所収の都市計画関連資料を用いた。3年目は、室蘭や釜石や製紙業などの重化学工業、ドイツの製鉄業社宅街との比較を行ないその空間特性を把握し、特に、建築・都市史の視点から同時代的な位置づけを行なった。

## 4. 研究成果

以下、各年度毎の成果を示す。  
2010年度の成果は、下記の通り大きく3つある。

(1)まずは、新日本製鐵(株)広畑製鐵所所蔵の福利厚生施設関連資料の収集と整理である。収集し得た資料は施設配置図が中心であり、住宅図面は配置図に記載される単線の間取に留まった。とはいえ、配置図はいずれも建物の外形を把握できる縮尺であるため、社宅街の構成を把握する上で有効なものである。中でも、幹部職員社宅地区である京見と最大規模の工員社宅地区である夢前の詳細を把握できたことが大きな成果で、格子状グリッドの全体構成に社宅等級が反映している様が見とられた。また国土地理院所蔵の旧版地図(1/2万5000)1926～1987年のうち7年分を入手した。これにより、社宅街はもとより市街地の拡大を視覚的に追うことが可能となった。特徴は、都市計画による土地区画整理と並行して社宅街開発が実施されているため、市街化の余地を残して各社宅街が点在することである。こうした社宅地の配置は進来要の意図とも合致するものである。このほか京都工芸繊維大学大学院生の協力を得て、横河工務所所蔵図面(寮など)の閲覧、複写を完了した。これらのうちには、配置図記載の施設には見られないものも含まれ、姫路市街のものと思われる。ただし、社宅図面の入手が今後の課題として残された。

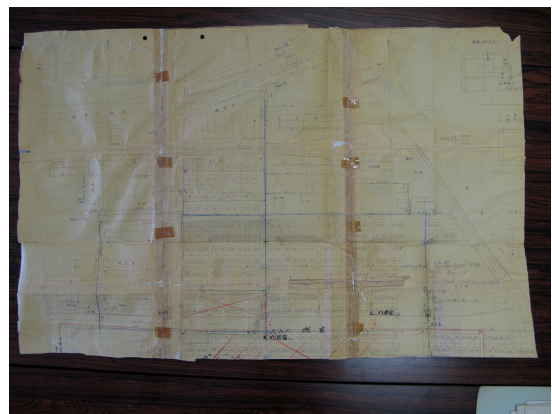


写真 社宅管理事務所所蔵資料の一例  
夢前社宅(工員地区)配置図

(2)つぎに社宅街拡大の変遷の把握である。上述の製鐵所所蔵資料と旧版地図の情報に『広畑製鐵所三十年史』、『広畑日誌』の内容を加えて空間的な広がりを検討した。その成果を旧版地図へプロットしその位置関係を視覚化した。また京見社宅街の配置図をリライトしたものを合わせ日本建築学会学大会へ投稿した。このほか、研究開始時には入手済であった進来要『建設ヲ顧ミテ』(1941)を中心に広畑における製鐵所建設の経緯と社宅街

の展開を追い、室蘭製鐵所と比較した論考をまとめ、日本建築学会若手奨励特別研究委員会の『企業経営都市の盛衰とその空間構成』(2011.3)で公表した。ただし、1941年以降、住宅営団が社宅街開発を担ったことを把握したが、その詳細については把握しきれず今後の課題として残った。

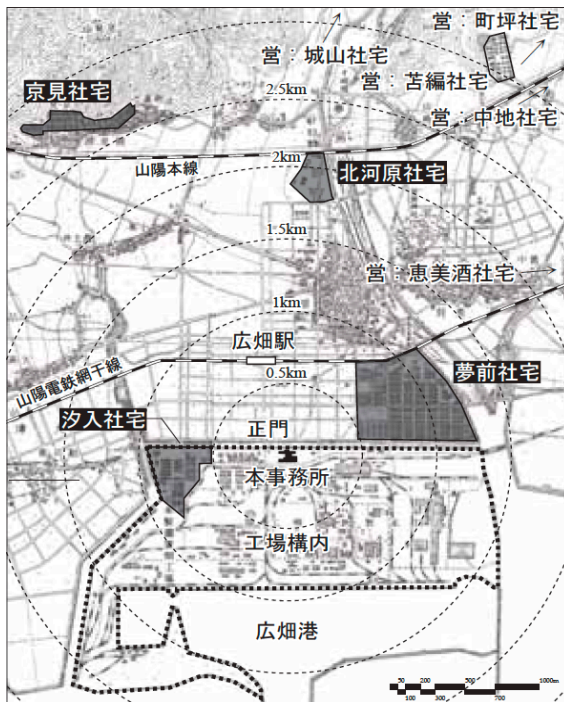


図 旧版地形図を元に作成した社宅街位置関係図

(3)最後は、ドイツ・ルール地方の企業住宅地調査である。本調査では神戸大の中江博士にご協力いただき、世界的鉄鋼メーカーの現ティッセン・クルップ(旧クルップ)社の本拠地であるエッセン市、ティッセン社のデュイスブルグ市、G.H.H.社のオーバーハウゼン市の社宅街の現況を確認した。併せて、工場、社宅街および産業遺産を元とするIBAエムシャーパークに関する資料の収集を行なった。クルップ社の資料館であるエッセン市郊外のヴィラ・ヒューゲルでは、社宅配置図や古写真を確認できた。また、本課題の範疇を超えるが、当該資料の全貌および同社と日本企業の繋がりを把握しその影響を検討することが今後の課題となり得る。



写真 クルップの社宅街 Kolonie\_Altenhof II

2011年度の成果は、下記の通り大きく3つある。成果となる視点は(4)社宅エリア内に建設された福利厚生施設の種類と施設配置(5)新興工業都市計画(6)住宅営団の関与について把握である。

(4)については『広畑日誌』を元に建設年と種類を把握しリスト化した。また、社史や郷土写真集から古写真を収集した。この過程で、福利厚生施設中、遠藤新設計の京見会館(1941)には、長谷部・竹腰事務所案があることも明らかになったが、建築家への依頼の経緯を把握できる資料の所在は掴めなかった。とはいえ、進来要が設計などは民間業者に依頼することが望ましい旨を自著で述べており、複数の福利厚生施設設計を担った横河工務所を含めてその方針が実現したことを理解する手がかりともなった。ほか、戦後のRC造アパート社宅は石本設計事務所や住宅公団が設計を手がけていることも設計図の図面ラベルから把握した。さらに、球場や体育館など戦後を含めて現存する福利厚生施設の現況把握を行なった。しかし、前年度の課題となった木造社宅の図面は発見できず、住宅の詳細の把握はできなかった。

(5)については国立公文書館所蔵『公文雑纂』所収の「都市計画決定の理由書」と添付図により道路の種類と幅員、用途地域を把握できた。併せて国の方針の新興工業都市計画を契機に姫路市や周辺町村が都市計画決定を行ない、さらには合併を模索する様が郷土史や社内報『鐵の響』から理解できた。このことは、民間の開発に行政が追従する様として理解することに繋がるであろう。



図 国立公文書館所蔵の都市計画図「広畑都市計画地域指定第一図」

(6)については『広畑日誌』から住宅営団開発の住宅地名を把握したが正確な場所が特定できなかった。よって、国土地理院所蔵の米軍撮影空中写真の購入し、兵庫県立図書館所蔵の都市計画図を遡り、大凡の位置を特定すると共に、広畑製鐵所関係者

の方に現地をご案内いただき、製鉄所OBの方に聞き取りを行なった。このうち苦編に旧木造住宅と判断できる住宅を確認できた。但し、住宅営団の元資料の把握はできなかったため、今後、西山文庫での資料収集を行うこととした。調査の過程で、新日鉄都市開発(株)が戦後のRC造アパート社宅図面と配置図を所蔵していることを確認したが、仔細を把握することができなかったため、研究費の一部を繰り越し、次年度に閲覧と複写を行なうこととした。



写真 住宅営団開発の苦編の木造住宅

2012年度の成果に結びつく視点は、広畑製鉄所の特徴を相対的に把握するため、民間から1934年の日鐵合同に参加した室蘭と釜石との比較、また、海外事例との比較である。室蘭と釜石については、基本的な情報収集と調査を完了している。最終年度は広畑の補足調査を兼ねて(7)神戸地方法務局姫路支所、(8)兵庫県公館、(9)国立公文書館・国立国会図書館および後藤・安田記念東京都市研究所で、都市計画関連資料や特に昭和20年代の不燃化に関する資料の収集と分析を行なった。

(7)では旧土地台帳を中心に、用地取得の状況や地目を把握した。ここでは、京見を中心に住宅営団開発の旧土地台帳を閲覧・複写したが、大きな面積を一括で登記し地割の詳細が把握できないものや登記がなされていないためか旧土地台帳の所在自体が不明なものもあった。しかし、入手分から日鐵の土地取得経緯の概要を把握することができた。(8)では京見と幹部社宅の最終候補地となった苦編における住宅営団の計画を配置図の図面レベルで把握でき、当初、英賀保駅を中心に放射環線状の都市計画がなされたものの、南半分は実現しなかったこと、住宅地計画と実現された住宅地には道路幅員や配置戸数に相違があることがわかった。(9)では企業による計画と法定都市計画相互が各々計画を推進する様相を把握した。

室蘭と釜石の違いは、開発年代の違いによって広畑では都市計画が同時に進行すること、進来要の言説における石炭供給地近接の室蘭、鉄鉱石供

給地の釜石との違いが敷地選定に大きく現れていることが明らかになった。都市計画的な視点では、1917年開発の鞍山製鉄所の計画の類例といえるが、広畑は大都市近接という点で異なる。とりわけ、旧姫路市域に近接する広畑では、福利厚生施設の一部を市内の民間施設を借り上げて当てること通勤者を念頭におき、社宅供給数が少ないことが明らかになった。また、全体の計画を先行させつつも、将来の拡大に備えて土地を確保する点で、アメリカ中南部の紡績業都市であるキングスポートに類似することが理解できた(研究分担者である基盤

(B)での調査成果)。なお、室蘭と釜石について収集できた新規資料により、室蘭は日本建築学会計画系論文集(2013.7掲載決定)、釜石は日本建築学会大会梗概にそれぞれ投稿した。今後、広畑製鉄所の土地選定、取得経緯と社宅街の開発の特徴、開発を指揮した進来要の言説と実際の開発に関する視点で成果公表を行ないたい。

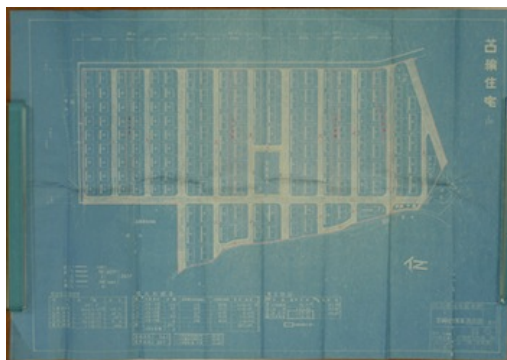


図 住宅営団開発の苦編住宅



図 土地区画整理前の現況図

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計1件)

- ① 角哲、日本製鋼所と日本製鐵の福利厚生施設整備と室蘭の都市形成における役割について -室蘭における鉄鋼業社宅街 その2-、日本建築学会計画系論文集、査読有、第78巻第689号 2013.7、p.p.1613-1619

〔学会発表〕 (計2件)

- ① 角哲・中野茂夫・中江研・小山雄資、釜石鉦山(株)の構内・公園(鈴子)社宅街の福利厚生施設と配置、日本建築学会大会学術講演梗概集 査読無、2013.8(発表確定)、北海道大学
- ② 角哲・中野茂夫・中江研、日本製鐵(株)広畑製鐵所社宅街の展開と京見社宅街の施設配置について、日本建築学会大会学術講演梗概集、査読無、2011.8、p.p.293-294、早稲田大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

角 哲 (KAKU Satoru)

北海道大学・大学院工学研究院・助教

研究者番号：90455105